アドルフ・ロースの住宅改造とラウムプランの生成について

ON HOUSE-ALTERATIONS BY ADOLF LOOS
AND THE FORMATION OF THE RAUMPLAN

河田 智成*

Tomonari KAWATA

This paper deals with Adolf Loos's alterations to Duschnitz house and Mandl house, which have been positioned in a germinal stage of the Raumplan.

The purpose of this paper is to clarify developments of house-alteration by Loos on the basis of analyzing these works and show it as a process of forming the Raumplan. Therefore having an eye to fragmentization in both works, this paper makes clear various phases of fragmentization.

In a word, fragmentization gradually spreads to various phases of the interior and exterior of a house and intensifies to the extent of arising conflicts between fragmentary parts.

Keywords : *Adolf Loos, Mandl house, Duschnitz house, Raumplan, fragmentization, alteration*

アドルフ・ロース, マンドゥル邸, ドウシュニッツ邸, ラウムプラン, 断片化, 改造

序 本稿の対象と目的

ウィーンの近代建築家アドルフ・ロース(Adolf Loos, 1870-1933)は、第1次世界大戦中・大戦後の比較的短期間に、ウィーン郊外区において、一連の住宅改造を行った¹⁾。この一連の住宅改造は、ロース独自の建築手法であるラウムプラン(Raumplan)成立の重要な契機と成ったと考えられているものである²⁾。前稿では³⁾、一連の住宅改造の中からシュトラッサー邸(Villa Strasser, 1918-19)を取り上げて分析し、それによって析出されたシュトラッサー邸の特性を生成途上のラウムプランの構造として指摘した。本稿では、一連の住宅改造の内、シュトラッサー邸改造以前のドウシュニッツ邸(Haus Duschnitz, 1915-16)とマンドゥル邸(Haus Mandl, 1916)を取り上げる。

ドウシュニッツ邸・マンドゥル邸・シュトラッサー邸の3住宅は、ロース晩年の弟子ハインリヒ・クルカによるロースに関する最初のモノグラフ『アドルフ・ロース』(1931)で紹介された⁴⁾。クルカは、この著作において、建築を平面ではなく空間で計画すること、及び、それによって空間を経済的に使用すること、この2点をラウムプランの特性として強調し(以下、この2特性を空間性、経済性と記述)⁵⁾、シュトラッサー邸をラウムプランによる最初の作品として位置付けた。その後のロース研究は、このクルカの見解を追認し、ロースの住宅改造に空間性・経済性を読み取ることで、それをラウムプラン

の展開過程に位置付けるという方向へ進んだ⁶⁾。こうして、上記3住宅は、個別に研究対象とされることはなかったものの、ラウムプランに関係付けられて度々論じられて来た。

しかし、既往研究の方向を採る限り、住宅改造の現場で空間性・経済性と共に追求されたであろう別の問題は、空間性・経済性の問題の背後に隠蔽されざるを得ない。そこで、本稿では、ロース晩年に至って初めて明確に概念化されたと考えられるラウムプラン概念の形成過程を考慮して⁷⁾、既往研究の方向から転回する。即ち、個々の住宅改造をその制作の現場である改造過程に即して分析することで、これまで隠蔽されて来た問題にも光を当て得るような、個々の住宅の特性を見出したい。尚、このような方向を採るに当たり、ロースによる改造行為を様々な観点から論じたヘルマン・チェヒの小論「改造(Der Umbau)」(1989)から示唆を受けた⁸⁾。本稿における改造過程に即した分析は、ロースの改造においては「既存の構成要素が、変更と新しい要素を伴って、新たな統一に至る」⁹⁾というチェヒの指摘を、具体的に実証するものと成るであろう。

前稿で既に、断片化の問題に着目しながら、シュトラッサー邸を改造過程に即して分析した。その際、シュトラッサー邸の特性として、1)住宅内外の諸位相に亘る相互排他的断片化、2)それによって生じる、諸位相に亘る全体と断片に関わる相克、3)それ等無

* 九州大学大学院人間環境学府空間システム専攻
研究生・博士(工学)

Research Student, Dept. of Architecture, Grad. Sch. of Human-Environment Studies,
Kyushu Univ., Dr. Eng.

図1. マンドゥル邸建築許可図面

化せんとする自己否定の内在、以上の3点を指摘した¹⁰⁾。これを承けて、本稿では、前稿同様に断片化の問題に着目して、まず、マンドゥル邸を、続いて、ドゥシュニッツ邸を、改造過程に即して分析し、各住宅における内部・ファサードの改造内容と断片化の諸相を解明する。これを整理し、それぞれを他の住宅と比較することで、ロースの住宅改造の展開過程を浮かび上がらせ、それをロースのラウムプラン生成過程の一端として示すことが、本稿の目的である。

尚、本稿で言う「断片」とは、それを含む全体の中で明瞭な纏まりを持って自律する部分を指す。また、全体と断片の間の「相克」とは、断片がそれを含む全体への同化を拒否している状態を言い、断片間の「相克」とは、断片が互いに同化せず対峙している状態を言う。全く異質な断片が直接対峙すれば、互いがその纏まりを主張して、相互に排除し合うであろう。本稿では、このように構成要素間の関係を統辞論的に論じることによって、各住宅における断片化の諸相を解明することとする¹¹⁾。

本稿では、住宅の改造過程に即した分析を行う為に、改造当初の状態を確認出来る写真¹²⁾、及び、以下の建築許可図面を資料として用いる¹³⁾。マンドゥル邸改造の分析では(図1)、改造前を示す図面として、1895年6月26日付の新築時の図面を¹⁴⁾、改造後を示す図面として、1916年7月5日付の改造時の図面を、ドゥシュニッツ邸改造の分析では(図5)、改造前を示す図面として、1898年以前の新築時の図面を¹⁵⁾、改造後を示す図面として、1916年1月29日付の改造時の図面を用いる¹⁶⁾。

第1章 マンドゥル邸改造

1-1. 内部

1-1-1. 内部の改造内容

マンドゥル邸内部の改造に枠組みを与えているのは、住宅中央を街路側から庭側へ貫き、住宅を2分割する耐力壁である。住宅の街路側から見て耐力壁の左側に当たる部分が、平面・断面構成ともに改造前の状態を基本的に踏襲しているのに対して、右側に当たる部分は、側面に増築部が付加された上に、平面・断面構成ともに大幅に改造されている。このように独立して処理された左右の部分を、ブロックとして捉え、左側をBL、右側をBRとする(図2)。また、BL・BRから独立した改造として、庭側への2層のテラスの付加がある。

1-1-1-a. BL

BLでは、若干の仕切壁の増設・移動を除けば、平面・断面構成に改造による大きな変化はない。目立つ改造としては、BL1階の連続したサロン・食堂における軸性の強化が挙げられる。サロン・食堂には、改造前から街路側・庭側の開口構成によって全体を貫く軸が存在していた。この軸性の強化は、改造時の図面の段階では不明瞭であるが、実際には、次のように強化されている(図3)。まず、食堂が主室部と前室部に分節され、食堂主室部とサロンの間に食堂前室部が挿入された。それによって、サロン・食堂を貫く軸の奥行きが強調された。更に、食堂主室部では、移動・拡張された側面開口とそれに同幅で向かい合うニッチによって、食堂主室部固有の軸が構成され、これがサロン・食堂を貫く軸と直交している。それによ

図2. マンドゥル邸ブロック模式図

図3. マンドゥル邸主階構成図

って、両軸は互いにその軸性を強化し合っている。また、サロンでも、BR 1階ホールからの入口と側面開口を、サロン・食堂を貫く軸に対称に配することによって、この軸性を強化している¹⁹⁾。

1-1-1-b. BR

BR では、改造による側面側への 4m 弱の増築に伴って、側面へ張り出していた階段室が除かれた。BR 内部の複数の階段が、それに代わっているが、これらは基本的に、BR の街路側部分と庭側部分に挟まれた中間部分に、前室と共に配されている。このように、BR は、前室・階段に充てられた中間部分、居室に充てられた庭側部分、玄関・衣装室等に充てられた街路側部分、この3部分から成る(図2)。

BR 街路側部分の地上レベルには、階段室の側面張出部に付属し、階段室の地上レベルに直接アプローチする小さな玄関が存在していた。この導入部は、改造によって、複雑な構成を持つ玄関・衣装室に代えられている。この玄関・衣装室が、BR 街路側部分の地上レベル全体を占めている。玄関・衣装室の階高は抑えられ、2階との間に、中2階として、同じく階高を抑えられた居室が挿入された。また、玄関・衣装室が1階床レベルより 1.76m 下げられたことによって、地下階の階高を確保する為に、BR 街路側部分の地下階床レベルだけが、他のよりも 1.28m 下げられた。BR 街路側部分の2階は屋階への階段と居室に、屋階は2階からの階段とテラスに充てられている。2階・屋階の床レベルは他の部分と同レベルにあるが、地下階・地上レベル・中2階の床レベルが他の部分とはズレており、BR 街路側部分の断面構成は他の部分から独立している。

BR 庭側部分では、街路側部分のような断面構成の改造はないが、側面側への 4m 弱の増築によって、各階に拡張分だけ室、或いはテラスが付加されている。地下階では既存の地下室が連続的に拡張され、1階では改造前の厨房が増築部も含めたホールに変更され、2階では改造前の小室から変更された浴室に居室が付加され、屋階では既存の屋根裏部屋にテラスが付加されている。しかも、これらの拡張は、拡張部庭側に突出部が付加されている為に、室の単純な平面的拡張に止まっていない。屋階では、テラス庭側の突出部が展望室に充てられ、1階では、その部分がホールに付属するアルコーブに充てられている。

BR 中間部分は、断面図に明瞭に表れるように、街路側部分と庭側部分の緩衝空間と成っている。この部分の主要素である階段群の構成を確認する。街路側部分地上レベルの衣装室から庭側部分1階ホールへの階段は、1.76m 昇る導入階段である。このホールから中

a. 食堂

b. ホール

d. 庭側ファサード

c. 街路側・側面ファサード

図4. マンドゥル邸

間部分2階前室への階段は、直角に折れ、更に 180 度転回しながら、4.41m 昇るギャラリー形式の階段である。街路側部分中2階へのアプローチは、このギャラリー形式の階段をホールから 1.44m 昇った踊り場から入る。この中2階へのアプローチから、導入階段上部を5段昇ると、ホールに開かれた天井高の極端に低い小さな書斎に至る。中間部分内のこれらの複雑に構成された諸階段は、閉じた階段室とは異なる形式を採って、街路側部分と庭側部分の断面構成のズレを吸収している。更に、改造時の図面には表れていないが、衣装室と導入階段の仕切壁には、ホールから中間部分越しに衣装室、更には玄関までが見通せる開口が施されている。この中間部分が、視覚的にも街路側部分と庭側部分の緩衝空間となっていることが分かる。また、ホールからの視線が、中間部分で突然断たれることなく、ホールと同一の仕上げを施されたギャラリー形式の階段に沿って中間部分上方へ吸収されることも、中間部分の緩衝空間としての性格を示す。中間部分2階・屋階の前室も、緩衝空間として見做し得る。

1-1-2. 内部における断片化の諸相

1-1-2-a. ブロック内の断片化

改造当初の記録が比較的残っている BL 1階サロン・食堂と BR 1階ホールを対象として、ブロック内の改造内容を詳述しつつ、ブロック内の諸要素の断片化を指摘する。

BL 1階サロン・食堂は、互いに大きく開かれ、全体を貫く軸が設定されている。こうして、この2室には纏まりが与えられている。しかし、サロン・食堂には、各々固有の仕上げが施され、それが室の対照的な性格を決定している。即ち、サロンは、付柱で分節された白塗りの壁と、各格子に電球の埋め込まれた白塗りの格天井を持つ。食堂は(図3, 4-a)、色大理石の付柱、濃いオーク材のパネルで被覆された壁と、白塗りのプレーンな仕上げを施された天井を持つ。この天井の濃いオーク材の化粧梁によって、食堂は主室部と前室部に分節されている。尚、ロースは食堂の付柱を煉瓦積みになくすることを望んでいた¹⁹⁾。そうであったならば、明るいが冷たい印象を与えるサロンと、暗いが暖かい印象を与える食堂の対照は一層強調され

ていたであろう。この対照的な性格を与えられたサロン・食堂は、互いが互いの異物と化した断片と見做せる。そして、断片化したこの2室は、全体に纏まりを与える1つの軸上に併置され、異物と化しつつも全体の内に繋ぎ留められている。しかし、また、それによって断片間に相克を生じている。

BR 1階ホールには(図 4-b)、BL 1階サロンへの入口と側面の大開口によって軸が構成されている。ホール全体には、この軸の設定と、木格パネルによる仕上げの統一、ホールと付属のアルコーブの天井化粧梁の形式の統一、これらによって纏まりが与えられている。しかし、既述のように、ホールは、BR 中間部分のギャラリー形式の階段に開かれている為に、室としての明瞭な輪郭を持たない。また、ホールは、既存部と増築部の境界に位置する2本の柱と天井の化粧梁によって、2分されている。即ち、テラス・サロン・導入部・2階への動線の集中する既存部と、ハウスパー・窓際のベンチ・アルコーブの配された親密な増築部に、ホールは2分される。しかし、同時に、この2本の柱と天井の化粧梁が、ホールに纏まりを与える軸を強調している。

このようなホールに付属し、対称に配されたベンチ・本棚・化粧梁・窓枠によって構成されたアルコーブは、ホールに比べて天井高が抑えられ、完結した纏まりを持つ。このアルコーブは、ホールから自立した断片と見做せる。また、この断片としてのアルコーブが、ホール全体の纏まりから自立しようとすることによって、全体と断片の間に相克を生じている。

1-1-2-b. ブロック自体の断片化

BL・BR 両ブロックは、内部構成において固有性が与えられ、差異化されていた。即ち、BL は、既存の平面構成を踏襲した各階平面を積層させる断面構成を採り、BR は、既存の平面・断面構成を一掃し、断面構成のズレた2つの部分を緩衝空間を媒介にして繋いでいる。耐力壁によって分離される BL・BR は、互いに内部構成の独立した断片と見做し得る。

1-1-3. シュトラッサー邸内部との比較

1-1-3-a. 内部の改造内容の比較¹⁹⁾

マンドゥル邸には、シュトラッサー邸のように新しい階を加えるような増築はない。しかし、両住宅は、耐力壁が住宅中央を貫き、これによって分離される住宅左右のブロックの平面・断面構成が酷似する。即ち、軸性を強調しながら既存の平面・断面構成を踏襲したブロックと、大幅に改造されたブロックが併置されている。また共に、大幅に改造されたブロックの街路側には、他の部分から独立した断面構成を持つ導入部を含む部分が配され、庭側には、諸階段・アルコーブを持つホールを含む部分が配されている。但し、シュトラッサー邸では、街路側部分と庭側部分の間を耐力壁が占め、両部分は独立した2つのブロックと成っているのに対して、マンドゥル邸では、両部分間をそれらを繋ぐ緩衝空間が占め、両部分はこの中間部分をサンドイッチ状に挟んだ1つのブロックと成っている。

1-1-3-b. 内部における断片化の図相の比較²⁰⁾

サロン・食堂の断片化とこの断片間の相克という事態は、マンドゥル邸同様、シュトラッサー邸にも確認された。しかし、マンドゥル邸食堂が、固有の軸によって纏まった主室部に前室部が付加されていることを考慮すれば、マンドゥル邸では、サロン・食堂という断片間に、食堂前室部という緩衝空間が存在していることが分かる。

この緩衝作用によって、マンドゥル邸サロン・食堂間の相克は、カーテンを挟んで併置されたシュトラッサー邸サロン・食堂間のような、異物が直接対峙する相互排他的な状態には至らない。

アルコーブの断片化と、この断片とホール全体との間の相克という事態も、マンドゥル邸同様、シュトラッサー邸にも確認された。しかし、ホール枠内を分割して設けられたシュトラッサー邸アルコーブに比べて、マンドゥル邸アルコーブは付加的であるにも拘わらず断片としての完結性が低い。アルコーブを縁取る梁がホールから独立していないこと、ベンチがアルコーブとホールに跨って配されていることが、このことを示す。これに加えて、マンドゥル邸ホールが、シュトラッサー邸ホールのような明確な輪郭を持たないこともあって、マンドゥル邸におけるホール全体とアルコーブという断片の間の相克は、シュトラッサー邸のそのような、相互排他的な状態には至らない。

以上のように、BL・BR 内部では、シュトラッサー邸ブロック内のような部材レベルの顕著な断片化が確認出来ないのみならず、室レベル、アルコーブ等の室の構成要素レベルにおいても、比較的断片化が緩く、断片と全体に関わる相克も穏やかなものに止まっていた。

ブロック自体の断片化も、マンドゥル邸同様、シュトラッサー邸でも確認された。しかし、マンドゥル邸の各ブロックは、それぞれ内部構成という点では固有性を有するものの、シュトラッサー邸のような、ブロック内における全体と断片に関わる相克の形式という点での固有性は希薄である²¹⁾。また、マンドゥル邸のブロック内における全体と断片に関わる相克が穏やかであるということも、ブロック全体がブロック内の断片との相克に抗して纏まろうとする傾向を希薄にしており、これも、シュトラッサー邸に比べて、マンドゥル邸のブロック自体の断片化を緩める一因と成っている。

更に、ブロック自体の断片化が緩いということが、マンドゥル邸全体枠内に併置されたブロック間の相克を穏やかなものに止めている。シュトラッサー邸では、相互排他的に断片化したブロック間の相克が、外部に向かっての住宅全体枠の破壊、内部でのブロックの完結性の破壊に端的に視覚化されていた。それに対して、マンドゥル邸におけるブロック間の相克は、BL 食堂前室部の BR 中間部分との相関、BR 2階中間部分の BL への侵入が示すように、各ブロックが相互に排除し合うような地点にまでは至っていない。

1-2. ファサード

1-2-1. ファサードの改造内容

改造前に両側面に存在していた2つの塔の、一方が完全に、他方は尖塔部が、取り除かれている。しかし、既存部の勾配屋根は、街路側・庭側屋階の3連窓も含めて、ほぼ完全に残されている。

街路側ファサードでは、改造によって、既存部の勾配屋根に増築部のテラスが併置されている。改造時の立面図面にはないが、実際には、このテラス上端にはコーニスが、上部にはパーゴラが施されている²²⁾。これらはテラスを勾配屋根から分節し強調する。改造時の図面の段階では、街路側ファサードの地下階・1階・2階に当たる部分でも、勾配屋根を頂く既存部は、開口に若干のスケールの変更が加えられているものの、原則的に改造前のファサードを踏襲している。これに隣接する増築部のファサードには、既存部から独立した規則的な開口が施されている。改造時の図面の段階では、街路側ファサード全面で、既存部と増築部が対照的に扱われていたことが分

かる。しかし、実施された街路側ファサードは、地下階・1階・2階に当たる部分で、既存部の BL に当たる部分だけが改造前のファサードを踏襲し、BR に当たる部分が次のように大きく変更されている。街路側ファサードの BR に当たる部分には、増築部も含めて、BL とは断面構成のズレた BR 内部の必要に応じた開口が施された。実際の街路側ファサードの地下階・1階・2階に当たる部分では、BL に当たる部分と BR に当たる部分が対照的に扱われ、ここに、内部における耐力壁を挟んだブロックの併置が表出した(図 4-c)。

全面増築部である BR 側面ファサードには、改造時の図面の段階から、実施に至るまで、内部の必要に応じた開口が施されている。BR 内部の街路側部分と庭側部分の断面構成のズレが、この側面ファサードの開口構成を一層ランダムなものとしている。実施に至って、この BR 側面ファサードにおける開口構成の統一性の欠如が、BR 街路側ファサードにも及んだと考え得る。また、改造時の図面には描かれていないが、実施されたテラス上端のコーニス、屋階庭側展望室部分には施されていない。これは、展望室が、屋階テラス上に置かれたものではなく、BR 庭側への突出部を含む塔の一部であることを示す。

既存の平面・断面構成を踏襲する BL 側面ファサードは、改造時の図面では、既述の尖塔部の除去を除いて、ほぼ完全に改造前のファサードを踏襲していた。実施された BL 側面ファサードには、1階食堂の開口の移動、及び、2階庭側居室の開口の除去という変更が加えられた。しかし、この変更後も、開口は階の積層に従って配され、BL 街路側ファサードからの連続性は保持されている。

庭側ファサードでは、改造によって、勾配屋根を頂く既存部に、突出部によって構成される増築部の塔が併置され、更にその前面に、キュービックな2層のテラスが付加されている(図 4-d)。街路側ファサードの地下階・1階・2階に当たる部分とは異なり、庭側ファサードでは、BL・BR 間の対照よりも、塔とテラスという増築部と既存部の間の対照が全面に表れている。これは、BL・BR 内部の断面構成が庭側ではズレていない上に、テラスが既存部の地下階・1階の前面に付加されて BL・BR 間の対照を隠していることに因ると考え得る。

1-2-2. ファサードにおける断片化の諸相

街路側ファサードの地下階・1階・2階に当たる部分、及び、街路側ファサードから連続する側面ファサードには、内部における BL・BR の併置が表出し、街路側ファサードの屋階部分では、既存部の勾配屋根と増築部のテラスが併置されている。街路側ファサードにおいて屋階と下階が分節されずに連続していることを考慮すれば、街路側・側面ファサード全体には、次のような併置が表現されていると見做し得る²⁹⁾。即ち、伝統的な勾配屋根を頂き、既存の開口構成を踏襲した BL と、パーゴラによって強調された革新的なテラスを頂き、既存の開口構成を一掃した BR の併置である。このように、街路側・側面ファサードには、内部における断片化した BL・BR の併置が表現される(図 2,4-c)。更に、BL・BR の対照的な開口構成、及び、勾配屋根を水平に切断して完結するコーニス、これらに着目すれば、BL・BR が、街路側・側面ファサード上でも、明瞭な纏まりを持つ断片として表現されていることが窺える。

庭側ファサードには、勾配屋根を頂く既存部と、塔・テラスという増築部の併置が表現されている。塔が勾配屋根端部を切断していること、住宅全体を巡るベースメントの分節線がテラスの部分だけ

に施されていないこと、これらに着目すれば、庭側ファサードに併置された3要素が、明瞭な纏まりを与えられ、断片化していることが分かる。街路側ファサードが、側面ファサードを巻き込んで、BL・BR 両ブロックの併置を表現しているのと同様に、庭側ファサードも、側面ファサードを巻き込んで、既存部・増築部の塔・付加されたテラスという断片化した3モチーフの併置を表現している(図 4-d)。

1-2-3. シュトラッサー邸ファサードとの比較²⁹⁾

マンドゥル邸ファサードには、街路側・庭側共に、側面を巻き込んで、断片化したブロック、或いは、断片化した諸モチーフの併置が表現されていた。しかし、シュトラッサー邸ファサードのような表層の自律への志向は窺い得ない。即ち、マンドゥル邸ファサードの住宅全体枠と重なる各面は、シュトラッサー邸ファサードの自立した表層各面のように、面として断片化されることはない。更に、シュトラッサー邸街路側ファサードのように、表層上に記号的要素を導入することによって、ブロック・表層間の一致やズレを間接的に表現することもない²⁹⁾。マンドゥル邸街路側ファサードは、BL・BR の併置によって生じる内部のブロック間の断面構成のズレを、開口部の対照によって直接的に表現している。また、マンドゥル邸庭側ファサードにおける断片化した諸モチーフの併置は、内部における BL・BR の併置とズレているが、この内外のズレが表層に表現されることはない。

第2章 ドウシュニッツ邸改造

2-1. 内部

2-1-1. 内部の改造内容

ドウシュニッツ邸は、増築部を除いて、基本的に改造前の平面・断面構成を踏襲している。主な改造内容を確認する。最大の改造は、1階庭側への音楽室の増築である。この音楽室に接続する改造前の居間・食堂部分には、ホール・ハウスパー・食堂が再配分された。増築された音楽室上部はテラスとされ、その一部は居室とされた。即ち、2階庭側に居室が増築された。この居室上部もテラスとされた。また、玄関を含む階段部も大きく改造され、玄関からホールへ 0.9m 昇る大階段を持つ前室が設置されると共に、階段室頂部に塔屋が増築された。

比較的大きく改造された1階平面では、全体に亘って軸性が強化され、平面全体が3つの軸から成る多軸構成を採っている。増築部の音楽室を長手に貫く軸、既存部に新たに設定された玄関・前室・ホールを貫く軸、既存の軸を強化した室内庭園・食堂・ハウスパー・ホール・音楽室を貫く軸、これがドウシュニッツ邸1階平面を構成する3軸である。これらを、それぞれ軸 A・軸 B・軸 C とする(図 6)。

2-1-2. 内部における断片化の諸相

内部の改造内容を詳述しつつ、軸毎に諸要素の断片化を指摘する。

軸 A は、パイプオルガンを焦点とする。この軸は、改造時の図面の段階で、軸 A 両端部の袖壁・壁面分節によって設定された。改造時の図面の段階で、音楽室庭側壁面は、開口部・凹部・開口部に等幅で分節された。更に、実際には、この開口幅と凹部幅がホールからの入口幅 2.5m に揃えられた。改造時の図面には描かれていないが、実際には、音楽室庭側壁面を分節する色大理石の付柱に対応して、向かい合う音楽室壁面にも色大理石の付柱が存在し、この壁面を入口部・凹部・凹部に等幅で分節している。この付柱による壁面分節と、

図5. ドウシュニッツ邸建築許可図面

向かい合う付柱間の梁によって、軸 A に直交する 3 つの軸が設定され、音楽室が 3 つの部分に分節される。それと同時に、軸 A の奥行きが強調され、音楽室の纏まりが強化されている。

この音楽室には(図7-a)、室を取り巻く古代風のフリーズと、格子間に花卉が埋込まれ全面に薄く紋様の施された格天井という、固有の仕上げが施されている。軸 A とそれに直交する 3 軸、及び、この固有の仕上げによって、音楽室は緊密な纏まりを持つ断片と化している。ホールからの入口扉の形式が、それに対応する庭側テラスへの開口形式に合わされていることから、テラスとホールが共にこの音楽室の外部と見做されていることが分かる。これからも、音楽室が既存部から自立した断片として扱われていることが窺える。

軸 B は、改造時の図面では、明瞭ではない。しかし、実際には、改造時の図面では分割されていないホールとハウスパーが分割され、更に、軸 B の焦点としてホール突き当たり暖炉が設置されることによって、強い軸性を与えられている。玄関・前室・ホールを分割する開口の太い棧の左右対称の構成、前室の両側面にそれぞれ対称に 2 つずつ設けられた扉、これらの要素が軸 B の軸性を強化している。特に、前室内の 4 つの扉は、その内 3 つが見掛け上のものであり²⁰、軸性強化の目的で設けられたことは明らかである。

前室は白大理石の階段、石材による扉枠から構成され(図7-c)、ホールは濃いオーク材の化粧柱梁から構成されている(図7-b)。このように固有の仕上げを施された前室とホールは²⁰、それぞれ軸 B に直交する固有の軸を持つことも手伝って、明瞭な纏まりを持つ断片と化している。ホールと前室を分割する開口の棧が、ホール側の黒

図6. ドウシュニッツ邸軸構成図

図7. ドウシュニッツ邸

系木棧と前室側の白系石棧の接合によって構成されていることに着目すれば、この断片化した 2 室が異物として併置されていることは明らかである。互いが互いの異物と化したホール・前室は、軸 B 上に繋ぎなしに併置されることによって、纏まりを与えられると同時に、その間に相克を生じている。

軸 C は、改造前のロジヤ・食堂・居間を貫いていた軸を踏襲したものであるが、軸が延長されたことによって改造前よりも軸性を強化されている。そして、ホールとハウスパーが分割され奥行きが強調されたこと、外部・室内庭園・食堂・ハウスパー・ホール・音楽室・テラスを分節する開口幅が全て 2.5m に統一されたこと、これらによって、軸 C は改造時の図面の段階よりも一層軸性を強化されて実施されている。また、明るく光に満たされた[室内庭園・食堂]と[テラス・音楽室]で、ほの暗い[ホール・ハウスパー]を挟む明暗の構成となっていることも、この軸性の強化に寄与しているであろう。

食堂は(図7-b)、明るい色大理石仕上げの壁と白塗りのプレーンな天井を持つ。また、軸 C に直交する食堂固有の軸が、開口部の構成と壁面分節によって設定されている。ホールとハウスパーは、既述のように、濃いオーク材の仕上げによって全体として纏まりながら

も、それぞれ軸 C に直交する固有の軸と固有の天井高を持つことによって、明確に分節されている²⁹⁾。音楽室は、既述のように、固有の軸と固有の仕上げを有している。このように、軸 C に貫かれた諸室は、軸 C に直交する固有の軸と固有の仕上げによって、明瞭な纏まりを持つ断片と化している。引込み戸によって仕切られる食堂・ハウスパー間における、大理石とオーク材という異種の仕上げの繋ぎなしの接合、ハウスパー天井側面の食堂側への露出(図 7-b)、これらに着目すれば、食堂・ハウスパーという 2 断片が、互いが互いの異物と化して併置されていることは明らかである。また、音楽室庭側開口形式と同一の、ホール・音楽室間の白塗りの扉は、濃いオーク材で仕上げられたホールにおいては、明らかに異質な要素と成っている(図 7-b)。これに着目すれば、ホール・音楽室という 2 断片も、互いが互いの異物と化して併置されていることが分かる。このような関係にある各室は、軸 C 上に繋ぎなしに併置されることによって、群として纏まりを与えられると同時に、その間に相克を生じている。

2-1-3. シュトラッサー邸・マンドゥル邸内部との比較

ドゥシュニッツ邸 1 階平面を構成する 3 軸上の諸室は、固有の軸・仕上げを持って断片化し、繋ぎなしに併置されていた。このように断片化した諸室が繋ぎなしに軸上に併置されることによって、各室間に纏まりを与えられると同時に、相克が生じていた。また、この 3 軸が平面全体に緊密な纏まりを与えていた。即ち、軸 B に対するホール固有の軸が軸 C を兼ね、軸 C に対するホール固有の軸が軸 B を兼ね、軸 A に直交する音楽室内の 3 軸の 1 つが軸 C に対応し、軸 C が軸 A・軸 B に音楽室・ホールで重なり合う。このようなドゥシュニッツ邸 1 階平面の多軸構成は、マンドゥル邸 BL 内部サロン・食堂における軸構成が、平面全体で展開されたものと捉え得る²⁹⁾。

また、断片化した各室接続部の繋ぎを排して、異物の直接対峙を表現したディテールから明らかなように、ドゥシュニッツ邸内部の諸室間の相克は、断片化の比較的緩やかなマンドゥル邸内部よりも一層顕著である。即ち、ドゥシュニッツ邸内部における軸上の断片間の相克関係は、同様の軸構成を採るシュトラッサー邸内部サロン・食堂における断片間の相互排除的关系を先取りするものであった³⁰⁾。

2-2. ファサード

2-2-1. ファサードの改造内容と断片化の諸相

ドゥシュニッツ邸では、1 階音楽室・2 階居室・塔屋が増築されることによって庭側ファサードが大幅に改造された。庭側ファサードには、切妻屋根を頂く既存部に、増築部の塔屋が併置され、その 1 階・2 階前面に、増築部の音楽室・居室が付加されている。この音楽室と居室の陸屋根は、既存部の切妻屋根とは対照的な段状テラスを形成している(図 7-d)。

尚、塔屋の併置によって切妻屋根が切断されていること、テラス周囲のコーニス・手摺が陸屋根と切妻屋根との対照を強調していることに着目すれば、庭面ファサードに併置された 3 モチーフ、即ち、切妻屋根の既存部・増築部の塔屋・増築部の段状テラスが、明瞭な纏まりを持つ断片として扱われていることが分かる。

2-2-2. マンドゥル邸ファサードとの比較

ドゥシュニッツ邸庭側ファサードの構成は、同様に断片化した 3 モチーフ、即ち、勾配屋根の既存部・増築部の塔・前面に付加されたキュービクなテラスから成るマンドゥル邸庭側ファサードの構成と同一である。しかし、1 段目のテラスに施されたコーニスが住宅

全体を巡っているところに³⁰⁾、ドゥシュニッツ邸とマンドゥル邸の差異が読み取れる。マンドゥル邸では、住宅全体を巡るベースメントの分節線が庭側テラスには施されず、住宅本体から独立したテラスの断片性が示されていた。それに対して、ドゥシュニッツ邸庭側テラスは、側面ファサードも含めて見れば住宅全体に一体化されており、テラスの断片化は緩い。これは、マンドゥル邸庭側ファサードが、断片化した諸モチーフの併置を、側面ファサードを巻き込んで立体的に表現しているのに対して、ドゥシュニッツ邸庭側ファサードでは、この併置を庭側ファサード上で平面的に表現していることを窺わせる。

結 住宅改造の展開とラウムプラン

前稿で取り上げたシュトラッサー邸改造から遡行して、マンドゥル邸・ドゥシュニッツ邸における内部・ファサードの改造内容と断片化の諸相を解明した。ここで、前稿で既に得た知見も含めながら、本稿で適宜指摘して来た各住宅間の断片化の諸相の差異を、ロースの住宅改造の展開として捉え直し、その過程を纏めたい。

ドゥシュニッツ邸内部では、諸室が断片化し、繋ぎなしに軸上に併置された。それによって、各室間に纏まりを与えられると同時に、相互排除的な相克が生じた。ドゥシュニッツ邸庭側ファサードでは、既存部と増築部のモチーフが断片化し、ファサード上に併置された。

ドゥシュニッツ邸の内部・ファサードにおける、このような断片化は、マンドゥル邸 BL 1 階平面、及び、マンドゥル邸庭側ファサードに引き継がれた。但し、マンドゥル邸における諸室の断片化は、ドゥシュニッツ邸に比べて緩いものに止まった。しかし新たに、マンドゥル邸では、固有の平面・断面・立面構成を持つブロック単位での断片化が展開された。この断片化したブロックは、内部において併置されると共に、その併置が、街路側ファサードに、側面ファサードを巻き込んで立体的に表現された。

ドゥシュニッツ邸内部における諸室の断片化、マンドゥル邸内部におけるブロックの断片化は、シュトラッサー邸内部に引き継がれた。更に、シュトラッサー邸内部では室の構成要素にも断片化が及ぶと共に、何れの位相においても、断片間に相互排除的な相克が生じる程、断片化が進んだ。また、シュトラッサー邸ファサードは、内部のブロックの併置を直接表現するのではなく、ファサード各面を面として相互排除的に断片化し、その表層上に記号的要素を導入することで、ブロック・表層間的一致やズレを間接的に表現した。

以上のように、ロースの住宅改造において、断片化が漸次住宅内外の諸位相に及ぶと共に、この断片化が、その何れの位相においても、断片間に相互排除的な相克が生じる程に進行した。こうして、シュトラッサー邸改造において、相互排除的に断片化したブロック間の相克が、住宅全体枠を破壊すると共に、内部で各ブロックの完結性を破壊する地点まで進行し、断片化の試み自体が否定に晒されるに至った³⁰⁾。前稿で指摘したシュトラッサー邸の諸特性は、このような過程を経て獲得されたものと考え得る。

ラウムプランの特性とされる空間性・経済性を前提せずに、ラウムプラン成立の重要な契機と成ったと考えられているロースの住宅改造を分析することで、前稿で指摘したシュトラッサー邸の諸特性が生成する過程を明らかにした。空間性・経済性の追求だけでは、これらの特性は決して生じ得ず、むしろ、その生成過程に認め得る

住宅諸位相に亘る断片化の追求から、空間性・経済性も結果するであろう。また、空間性・経済性から逸脱する過剰な要素である、ロースの建築に特徴的な古典的モチーフ、贅沢な材料も、この断片化の追求の一手段として見做せる。これらを考慮すれば、上述したロースの住宅改造の展開過程は³⁰⁾、ロース晩年に空間性・経済性を特性として概念化されるラウムプランの生成過程の一端として捉え得る。また、このように捉えれば、空間性・経済性の追求に止まらないよりトータルな建築手法として、ラウムプランを理解出来る。

注

- 1) ロースによる一連の住宅改造とは、彼の建築家としての活動の中期に実施された以下の住宅の改造である。
 1. ドウシュニッツ邸(Haus Duschnitz, Weimarer Straße 87 Wien 19, 1915-16)
 2. マンドゥル邸(Haus Mandl, Blaasstraße 8 Wien 19, 1916)
 3. シュトラッサー邸(Villa Strasser, Kupelwiesergasse 28 Wien 13, 1918-19)
 4. ライトラー邸(Villa Reiter, Elßergasse 9 Wien 13, 1922)
 この間に表現したロースの建築作品は、大戦と持病の胃炎の影響によって、極めて少数に止まっている。それを挙げれば、この一連の住宅改造4題、チェコにおける住宅が1題、ほんの僅かのジートルンク、そして、小規模商業建築の改装が4題あるのみである。他の時期に多く見られるアパートの改装もこの間にはない。この間のロースの注目すべき建築活動は、一連の住宅改造と、殆どが計画に終わった夥しいジートルンクの計画案に絞られる。
- 2) Worbs, Dietrich, "Der Raumplan im Wohnungsbau von Adolf Loos" in AAVV, *Adolf Loos 1870- 1933: Raumplan-Wohnungsbau*, Ausstellung der Akademie der Künste 4. Dezember 1983 bis 15. Januar 1984, S.64-77 は、注6に挙げる彼の博士論文の概要的内容となっているが、S.69に、住宅改造がラウムプラン生成の1つの重要な契機であったことが指摘されている。
- 3) 拙稿「アドルフ・ロースのラウムプランとシュトラッサー邸における断片化について」、日本建築学会計画系論文集, No.509, 217-224 頁, 1998 年 7 月
- 4) Kulka, Heinrich, *Adolf Loos: Das Werk des Architekten*, Verlag Anton Schroll, Wien München, 1931
- 5) Ibid., S.13-15 のラウムプラン解説中の強調字体部分を引用する。「アドルフ・ロースによって本質的に新しく高度な空間思考が生み出された。つまり空間において自由に思考すること。」「ひとりの人が空間経済学の基礎を築いている。その人こそアドルフ・ロースである。そしてロース以来、以前に平面図について語ったように、ラウムプランについて語り得るようになった。」「構造力学が空間経済学と結び付いて初めて、近代的な(俚約的な)建物について語り得る。」
- 6) Münz, Ludwig & Künstler, Gustav, *Der Architekt Adolf Loos*, Verlag Anton Schroll, Wien München, 1964 は、最初の本格的ロース研究書であるが、ここでは、クルカの見解が追認され、シュトラッサー邸にラウムプランの萌芽が読み取られている。
 Rukschcio, Burkhardt & Schachel, Roland, *Adolf Loos: Leben und Werk*, Residenz Verlag, Salzburg Wien, 1982 は、現在までのロース研究の到達点を示す大著であるが、ここでは、シュトラッサー邸に加えてマンドゥル邸にもラウムプランの萌芽が読み取られている。
 Worbs, Dietrich, *Der Raumplan: Entwicklung der Raumbildung bei Villen- und Massenwohnbauten von Adolf Loos*, Diss., Stuttgart, 1982 では、住宅改造を含む住宅・集合住宅を中心にしたロースの建築作品の展開を、空間性・経済性という観点からラウムプランの展開過程として跡付けている。
- 7) 前掲3)拙稿第1章参照。
- 8) Czech, Hermann, "Der Umbau" in AAVV, *Adolf Loos*, Graphische Sammlung Albertina, Wien, 1989, S.159-172
- 9) Ibid., S.160
- 10) 前掲3)拙稿結語参照。
- 11) 即ち、本稿では、住宅を構成する要素の機能に関わらずに、構成要素を建築的記号と捉えて、その間の関係を論じるという方法を採る。その為、ロースを論じる際に併せて問題と成るであろう、断片化した構成要素の意味論的問題や、構成要素を断片化する意義の問題は、本稿では扱わないこととする。
- 12) Kulka, op. cit., Abb.76-79
Rukschcio & Schachel, op. cit., Abb.213, 587-588, 592-593
尚、Ibid., Abb.378-380, 586, 590 も参考にした。
- 13) ウィーン市の建築許可業務担当の Magistratsabteilung である MA37 は、区毎に設けられた Außenstelle に、建築許可図面を各番地毎・年代順に保管している。本稿で資料とした建築許可図面は、19 区の Außenstelle(1190 Wien, Gatterburggasse 14)に保管されている図面を、筆者が1995 年秋・冬に現地で許可を得て複写したものである。
尚、Ibid., Abb.589, 591 の改造後を示す図面も補助資料として参考にした。

- 14) マンドゥル邸の建築許可図面には、1895 年 8 月 10 日付の庭側のロッジア増築時の図面もある。
- 15) この建築許可図面の日付は筆者の複写図面中には見出されなかった。しかし、図面に塗布された印紙の発行年が 1898 年であった。
- 16) 1915 年 12 月 1 日付の図面には、塔屋の増築が未だ描かれていない。
- 17) サロンの写真資料はないが、Rukschcio & Schachel, op. cit., S.514 によれば、付柱等でもこの軸性の強化が行われたことが窺える。
- 18) Ibid., S.514 によれば、ロースは剥き出しの煉瓦積みの柱を予定していたが、施主が大理石に固執した。
- 19) シュトラッサー邸に関しては、前掲3)拙稿第2章2-2 節参照。
- 20) シュトラッサー邸に関しては、前掲3)拙稿第3章3-1,3-2 節参照。
- 21) シュトラッサー邸では、ブロック内における全体と全体に関わる相克が、アルコーブを縁取る切断された梁材、異物化したコラムに端的に視覚化され、ブロック固有の相克の形式を主張していた。
- 22) 断面図にはバーゴラが描かれている。
- 23) BL と BR の併置、既存部と増築部の併置が、それぞれ下部と上部に表現されているとも解釈出来るかもしれないが、屋階と下階が分節されていないことを考慮して、本文のように解釈するのが妥当であろう。
- 24) 前掲3)拙稿第3章3-3 節参照。
- 25) マンドゥル邸街路側ファサードのベースメントが開口により中断する部分に内外のズレが示唆されている。しかし、これを、シュトラッサー邸街路側ファサードにおける記号的要素の意図的使用と同様に考えることは難しいであろう。
- 26) 改造時の図面の前室には、ホールへ向かって右側だけに2つの扉が設けられていたが、実際には、左側にも、右側の扉に対応して、2つの見掛けの扉が設けられた。この時点で、右側の扉の内、地下階への階段の入口として設けられていた扉が、この入口が移動した為に、見掛けだけのものに成った。これらの扉が軸性の強調の為にあることは明白である。
- 27) 現在、前室は、玄関との間の棧が除かれて改造され、白塗りのプレーンな壁・天井の仕上げである。しかし、Kulka, op. cit., Abb.77 を見る限り、当時は異なる仕上げであったと思われる。何れにせよ、ホールと前室の差異は際立ったものであったことに間違いない。
- 28) 食堂の壁面分節は、改造時の図面の段階で確認出来るが、ホールとハウスパーの分割、及び、ホールに固有の軸を与える深い暖炉の設置は、改造時の図面の段階では確認出来ない。ホール・ハウスパーの具体化は比較的遅れたと推測出来る。
- 29) Loos, Adolf, *Trotzdem*, Georg Prachner Verlag, Wien, 1982 (初版 Brenner Verlag, Innsbruck, 1931), S.66 で、ロースは、自らの建築学校の設計教育における重点の1つとして、軸線を挙げている。伊藤哲夫『アドルフ・ロース』SD 選書165, 鹿島出版会, 1980, 202 頁には、ロースの住宅全般に確認出来る直交する軸線による空間の連続性と独立性の指摘がある。
- 30) 前掲3)拙稿第3章3-1 節3-1-2 参照。
- 31) 但し、このコーニスには側面ファサードの塔部でだけ途切れている。
- 32) ロースの住宅改造においては、断片化の進行と同時に、否定の表現の展開も窺える。ドウシュニッツ邸庭側ファサードにおける、切妻屋根の既存部と段状テラスの増築部の対照は、既存要素を新要素によって否定し、両要素を総合することで全体を再構成するという、改造行為の弁証法的過程に介在する否定の表現と見做し得る。このファサードにおける既存部と増築部は相互批判的關係にある。マンドゥル邸では、この相互批判的關係がブロック間で結ばれる。即ち、既存の内部・ファサード構成を残すブロックと、平面・断面・立面構成を大幅に改造されたブロック間の対照が、改造行為の弁証法的過程に介在する否定を表現する。シュトラッサー邸内部においても、断片化したブロック間に、マンドゥル邸同様の相互批判的關係が結ばれた。そして、更に、ブロックの断片化を押し進めることで、ブロックの断片化自体を無化するという、自己否定の表現に至っている。このような否定の表現の展開は、ロースが建築制作に意識的に取り込んだ批評性の深化を示すと考え得る。ロースの改造行為の弁証法的性格に関しては、Czech, op. cit., S.160,171 参照。
- 33) この展開過程には、通念的な近代建築史観が唱えるような、空間の相互貫入や開放とは対立する空間の扱いが認められる。

図版出典

- 1,5) ウィーン市 MA37 の 19 区 Außenstelle 保管の建築許可図面の複写。
 - 2,3,6) 筆者作図。
 - 4) a: Rukschcio, Burkhardt & Schachel, Roland, *Adolf Loos: Leben und Werk*, Residenz Verlag, Salzburg Wien, 1982, Abb.593 / b: Ibid., Abb.592
c: Denti, Giovanni & Peirone, Silvia, *Adolf Loos opera completa*, Officina Edizioni, Roma, 1997, p.142 / d: Rukschcio & Schachel, op. cit., Abb.590
 - 7) a: Ibid., Abb.587 / b: Lustenberger, Kurt, *Adolf Loos*, Artemis Verlag, Zürich, 1994, p.96 / c: Rukschcio & Schachel, op. cit., Abb.378 / d: Ibid., Abb.586
- 尚、図 4-c,d 及び図 7-b,d は、改造直後のものではないが、ほぼ当時の状態を伝えている。図 7-c のドウシュニッツ邸前室の状態は、注27 参照。

(1999年10月27日原稿受理, 2000年4月26日採用決定)